

■『a Beautiful Day』

天現寺の交差点手前で突然「Edo River」がFMから流れてきたのだ。驚いて車を停めラジオの中の自分の曲を聴いたのだけど、その時は「こんなこともあるのか」と思った。渋谷川沿いの黒い桜の木で蝉が鳴いていた。そのイントロが何らかの合図だったのかもしれないけれど、あの日から大きく流れが変わったような気がする。「EDO RIVER」から「a Beautiful Day」に至るまでの記憶がほとんどないのは、きっと自分の意志とは別の目論みや全てに一気に飲み込まれたことと、それまでに体験したことのない新鮮なショックが続いたからだ。

ヴィンテージのアコースティック・ギターを買ったのは「a Beautiful Day」のプリブロ時。その時はとにかく金がなく、あと一ヶ月食べるかどうかというありさまだった。それなのに衝動買いをした。中古のGibson J-50(後に調べてもったら1969年製と判明)。思いっきり枯れた音が気に入ったのだ。ローリング・ストーンズ「ベガーズ・バンケット」あたりのあの音。Gコードを鳴らすとそのレコードの雰囲気か蘇ってくるほどだった。ギターは今でももちろん元気、ライブでどう扱おうがタフな音をいつも鳴らしてくれる。あいつはたくさん曲を運んできた。

95年のいつだったかは忘れたけれど、夜中の井の頭線のホームで震えた記憶があるし、おそらく時期的にも初春。下北沢のとあるマンションの地下にあった満十吾さんの仕事部屋をお借りし、TASCAM488を囲んで作業に没頭した。その部屋にはおびただしい数のLPレコードがあった。アレンジのイメージを伝える際も「こんな感じじゃないか?」とすぐに参考となるレコードが聴けた。マジックなLP群の背中を追いかけるだけでも息抜きになったし、ちょっぴり豊かな気持ちにもなれた。作業中はコーヒーの消費量も半端じゃないから、豆は大きな袋の物をよくピーコックで買った。キリマンジャロブレンドの濃い目が流儀で「直枝くんの煎れたコーヒーは酸っぱ濃いや」とさんざん笑われたものだ。その時のDemo作業はDisc-2の5曲(M-3からM-7)で聴けるが、完璧に作り込まれたDemoで恐ろしいほどだ。前作「EDO RIVER」の出来にはもちろん手応えがあったし「ひたすら気持ちよければOK」というのがジャZZの基準として全員にあった。ライブでの再現性はこのメンバーならほぼ問題ない。だから何をやってもよかった。

夏に響く音を提供することになったのは偶然だったけれど、アルバムを年に1枚出すサイクルは、「EDO RIVER」の好成績もあってコロムビアと正式契約が成立したからだ。音楽性もよりソウルフルに、内部では少しずつ自己のヘヴィなルーツ音楽に回帰しはじめていた。バンドにとって初のシングルとなった「It's a Beautiful Day」はアレサ・フランクリン「I Can't Wait Until See My Baby's Face」に影響を受けている。それはソウル音楽をあらためて勉強をし始めてから出会った曲で、Aメロの出だしなんてほぼ同じなのだが、その後半はジョージ・ハリソン「マイ・スイート・ロード」調のかけあいとなるという、独自のブレンドはあくまでも「酸っぱ濃いや」ものだった。「ハイウェイ・ソング」のブレンド具合はさらに濃く、フランク・ザッパ「アポストロフィ」を目指しつつもジョン・リー・フッカーやライト・ニン・ホプキンスの手癖をなぞることからひょこりと生まれてきた。再発見だけの日常とルーツ回帰。力を抜いて素直に感じたままにやればいいと、開き直ったのがこの時期だ。さらさらと明快な曲が生まれたし、メンバーも毎日興奮しながら懸命に作業をこなした。

批評性うんぬん、その理屈を捏ねだせばとんに周りの世界は曇り出す。これは不思議なことなんだけど、作り手はその自分の音楽に対して常に批評的であるべきなのだが、物を世に送り出す時には上手にそのロジックの庭から抜け出さねばならない。ある日、やっかいな論理の迷路から一歩抜け出すことができた作家はずっと楽になれるはずなのだが、なかなかうまくはできないものなのだ。徹底的に外へ向かおうとした「a Beautiful Day」だが、無自覚にもその微妙な一線を越えた瞬間があったのかもしれない。「It's a Beautiful Day」という曲が多くの人に愛された理由のひとつには、作り手側にもいい意味での無防備さがあったからだと考えなくもない。

余談だが、このプリブロ時の夕飯は「王将」のテイクアウトが多かった。大田くんが頼んだ「チャーハン弁当」はなんとおかずがなく、チャーハンと白米が半々に入ったものだった。彼はそれを見て「ふざけるな!」と一度は箸を投げたが、文句をぶつぶつ言いながらもしかたなく食べたことを思い出した。はたしてチャーハンはおかずだったのだろうか?

"Home Demo覚え書き"

今回のリイシューにあたって、Home Demoの音質(オリジナル版はトータル・コンプがきつすぎたので…)を良くするためにできるだけリミックスを行おうと思い、TASCAM488は友人宮原清くんの愛機をお借りした。外付けのエフェクターもなるべくチープな宅録感をそこなわぬよう、昔から使っていた(耳鼻咽喉科のサチョーから貰った)コルグのアナログ・ディレイ(Korg Signal Delay)と90年代のZoomのリヴァーブを使用し、それをProToolsに流し込んでから作業をしている。音をたちあげてもすぐにバランスがとれたし、フェーダーの上げ下げも自由自在で、さすがにHome Demoは自分の分身なのだと思った次第。

「車の上のホーリーキャット」。これは好きな曲だ。じつはアイデアは「エレキング」以前にすでにあって、同タイトルのまったくの別曲(未発表)も存在する。借りていた駐車場でボンネットの上に眠る猫を見てひらめいたわけだが、まあ、こういう時は車を走らせないわけで、困るけどどうしめたいな…。欲張らずに、ふと外に出てみるとうこうしているんことが歌になるのだ。

「It's a Beautiful Day」もHome Demoの段階でのアレンジはほぼできあがっている。ピアノもやんちゃなフレーズが多くて面白い。この頃はキーボードで曲を作ることも多く「市民プール」はウーリツツアの音源で作った。技術がない分、不思議なテンション・コードや展開が生まれたりして予想外の成果を生むことが多々あった。「私」視点の作詞も幼少期の記憶とリアルタイムの感情を混ぜ合わせて演出。ここで市民プールとは松戸駅東口の山の上にあった市営プール(水がやたらと冷たかった)と本牧市民プールのイメージの合体。野球場の隣接するのは本牧の方で、今も高速から見える赤土の崖の下にあるはず。当時、横浜ヴァージン・メガストアの人たちに混ざって野球をよくやっていたんで本牧はたまに行ったのだ。帰りは中華街というコースが懐かしい。曲作り=アレンジの時代。そのずうずうしがHome Demoの面白みだと思う。

中でも「世界の果てまでつれてってよ」はかなり反則で、今回はプレートのリヴァーブを思いっきりかけてウオー

ル・オブ・サウンド風のリミックスを作った。元々、この曲はフィル・スベクター風でいきかかった(現場ではかなわなかった)ので、ここにそのヴィジョンを残しておくのも一興だろうと。聴き取り様によってはロイ・オービソンからシュガー・ベイブに通ずる不思議なポップス。そんな夢のエッセンスを感じてもらえれば幸いだ。

矢部くんの「未来の恋人たち」はバックトラックができただものの「肝心のメロディがうまくならない」とのこと、ぼくが後にメロディをのせた。イメージはTLC「Diggin on You」。つまりはベビーフェイス調。こういったブルーザーナリフを積み重ねて成り立つ曲はなかなかぼくには書けないのだが、それに対する回答のようなものが「摩天楼に雪が降る」だった。それにはいくつかわバージョンがあり、ここで珍しいのはボツになった「Summer Snow Version」ということになるだろう。歌詞もメロディも違うので笑いながらお楽しみください。当時のヒップホップの手法に影響を受けつつもかなり本質は泥臭いこの曲、ベシックはスティーヴ・ミラーバンド「Shu Ba Da Du Ma Ma Ma」の間奏部分のループだったり、さらにはマイナーコードを使う時のザ・バンドを意識して作られた。ちなみに「新宿西口下水道ミックス」はおいしいサンプリングの嵐。ティム・ハーディンすら登場するマッドナリミックスだ。毎週のようにヒップ・ホップの12インチを買い漁っていた頃で、ドラッギーなトラック作りには興味があった。この3ヴァージョンはマニアックなヘヴィリスナーに捧げたい。

直枝政広